

「織田信長像再考」趣旨説明

織田信長は日本史上恐らく最も著名な人物の一人とあってよく、一般的には時代に先駆けた革新的人物とされてきた。十六世紀に入り、日本に伝えられた鉄砲という武器をいち早く利用したり、同じ時期に伝えられたヨーロッパのキリスト教にも伝統的観念にとらわれず理解を示したりした、という点はその疑う余地のない例証と考えられたからである。特にイエズス会宣教師が記した、「よき理解力と明晰な判断力」によって日本の神仏への信仰や、当時の人々が信じていた占い等の呪術的行為をすべて迷信と見なしていたという、いわば無神論者を彷彿とさせるような証言は、この信長像を強化するものであった。

こうした見方の故か、戦国の当時から二十世紀の戦前に至るまで日本人に多大な影響を及ぼしてきた天皇の権威を重んぜず、むしろ乗り越えようとしていたとの想定もまた、戦後の学界では信長像を形成する上での有力な見方となってきた。そしてこれらの諸点をふまえ、弱体化したとはいえそれまで命脈を保ってきた室町幕府を織田信長は全面的に否定し、当時の日本人の常識を超える新たな方法により、全国を自らの権力で制覇することを構想していたという点は、織田政権を考える上で暗黙の前提とされてきた。

ところが近年になって、まず天皇と織田信長との関係が見直されるようになった。信長が朝廷を軽視したり、これと特に対立したりする行為が見られない点が重視され、織田政権は、従前の朝廷の権威と共存する公武協調の政権であったとの見解が注目を集めるようになった。

次に専制的であるとされていた織田信長と家臣との関係が、信長から家臣それぞれに与えられた領国の支配を通して再検討された。そしてその結果、信長に領国支配を認められた家臣が、一定の自律性をもって支配していたことが指摘され、織田領国総体が、地域それぞれの自律性を許容する他の戦国大名領国に近似していることが指摘された。

さらに信長が時代に先駆けた革新的な英雄であるとみる考え方にも疑問が提示されるようになった。信長といえども、飛びぬけて時代に先んじていたわけではなく、個人的な野心も欠陥もあったという、いわば「等身大」の信長像が模索されるようになった。

こうした学界の流れの中で金子拓氏により、織田信長はそもそも室町幕府の滅亡を望んではいなかったし、自ら全国制覇を望んではいなかった、また天皇の権威を認め、その存続を願っていたと考えられる、という画期的な信長像が提示されるに至ったのである。従来の信長像に現在見直しが必要になっていることは明らかだと思われる。織田信長及び織田政権の研究は、従来の枠組みの一つ一つを再検証し、確実に具体的な論点をてがかりに、新たな織田信長像を模索すべき段階に至っていると考えられる。

以上のような現状把握に基づいて、本企画では、現在の織田信長研究を牽引している中心的な研究者の一人である金子拓氏をお招きして基調講演をしていただき、三名の学会メンバーによる、信長像に関する報告をこれに加え、それらを通して研究の現状に少しでも貢献できればと考える次第である。

(東洋大学文学部史学科 神田千里)